

〈論文〉

富良野盆地の土地利用と観光

下 川 和 夫

はじめに

北海道の雄大な景観は、国内はもとより最近では台湾をはじめとするアジア近隣諸国からも多くの観光客を集めている。北海道の「ヘソ」にあたる富良野盆地は、札幌と道東、道北を結ぶ観光ルートの結節点という地理的に優位な位置にあり、最近20年あまりの間に北海道観光の拠点のひとつに成長した。ここでは農業景観そのものが観光資源のひとつとなっているという点では、全国的にみてもまれなケースである。

本論では富良野盆地周辺に広がる丘陵のうち、美瑛町の「北西の丘」を例にとり、観光の対象となっている農業景観が、戦後から現在にいたる間にどのような変化を遂げてきたかについて、土地利用の変化を中心に振り返るとともに、農業と観光における問題点について論じることとする。

1 富良野盆地の概要

北海道の中央部に連なる南北方向の盆地列（中央低地帯）のうち、最も南に位置するのが富良野盆地である。上富良野から富良野にかけての盆地中央部には空知川水系によって、また北部の美瑛市街付近には美瑛川によって埋積された沖積低地と河岸段丘、扇状地などが発達する。かつて富良野盆地の沖積低地に広がっていた「谷地」は、大正時代に始まる富良野排水事業による土地改良によって、水田化が早くから進められてきた。十勝火山群からもたらされる豊富な水と、内陸に位置するため夏の気温が高いという条件が稲作を可能にしてきた。

一方、盆地周縁の山麓部には百数十万年前に噴出した流紋岩～デイサイト質の十勝熔結

凝灰岩が、北部の美瑛付近にはそれより古い美瑛熔結凝灰岩（池田・向山，1983，国土地理院，1990）¹⁾が広く分布する。熔結凝灰岩がつくる丘陵地帯（開析された火砕流台地）では、水利と地形的な制約のため畑作や酪農中心の農業が行なわれてきた。火砕流堆積物に広く覆われた美瑛町や上富良野町は、米作りの盛んな上川地方にあって稲作農家の割合が低く、豆類，穀物類中心の畑作地帯となっている。

2 美瑛町「北西の丘」の景観とその変遷

(1) 「北西の丘」の景観

富良野盆地の北部には、上川盆地と富良野盆地を分ける丘陵地帯、いわゆる「美瑛の丘」が広がっている。この丘陵の北西部は、美瑛市街の西方で丘陵を貫いて流れる美瑛川によって、それ以南の丘陵から切り離されて独立しており、「北西の丘」とよばれている（図1）。

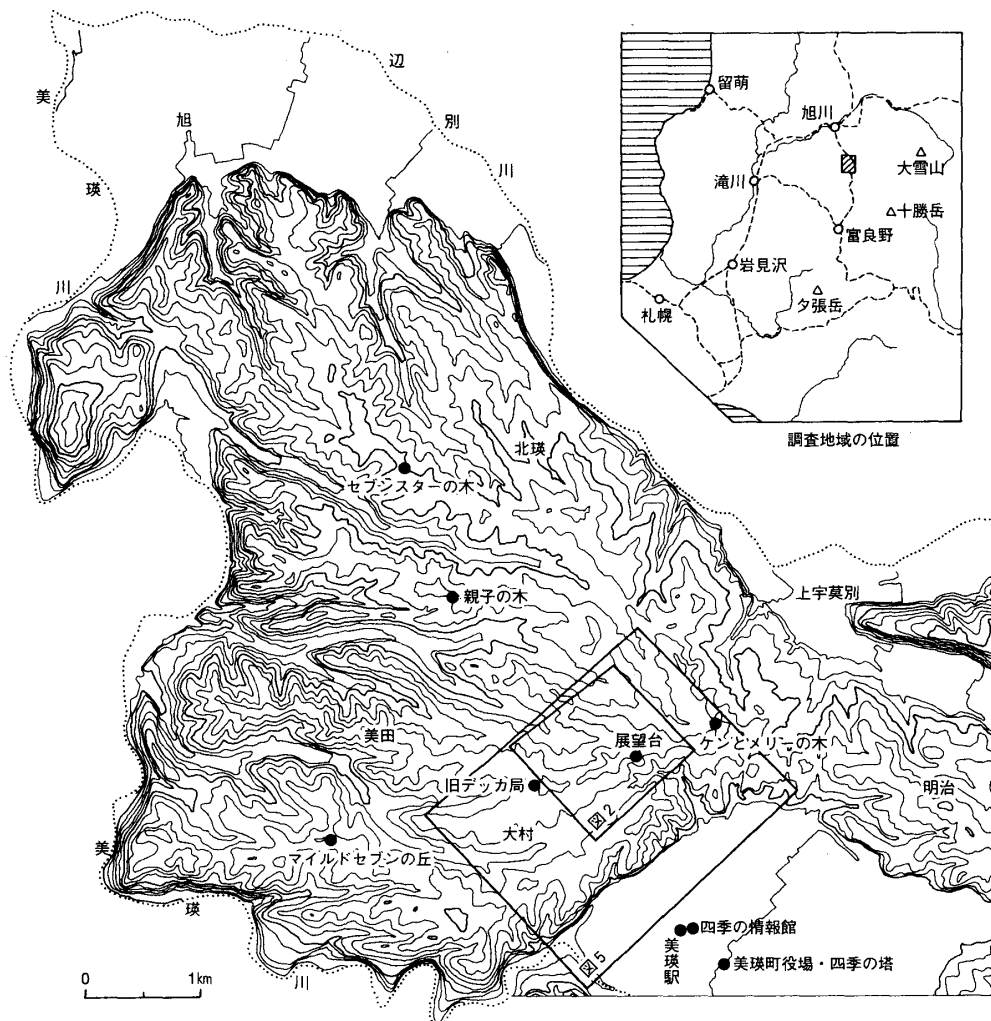


図1 調査地域の位置と「北西の丘」の概要

丘陵の高度は、市街地に接する南東端で 300 m 弱と最も高く、西～北西に向かって徐々に低くなって北西端では 200 m 前後となる。丘陵の縁は辺別川と美瑛川の侵食によって生じた急斜面に囲まれている。丘陵面は西～北北西方向に流下する数本の必従谷に開析されており、下流部の谷底には狭長な沖積低地が形成されている。しかし定高性があるので遠望すると平らに見える。

水利上の問題で水田化が難しかった丘陵では、早くから穀物、豆類中心の畑作と酪農が行われてきた。現在では小麦、馬鈴薯、牧草、甜菜、小豆（1998年の作付面積の多い順）などを中心に、スイートコーン、白菜、キャベツなどが栽培されている。とくに美瑛は馬鈴薯の優良な産地として名高く、7月頃には一面のメイクイーンの花が美しい。

耕地は矩形に区切られているので、キルトのパッチワークのような市松模様を描く（図2）が、波打つような丘陵面の地形のため、見る角度によって一区画が直線と曲線に区切

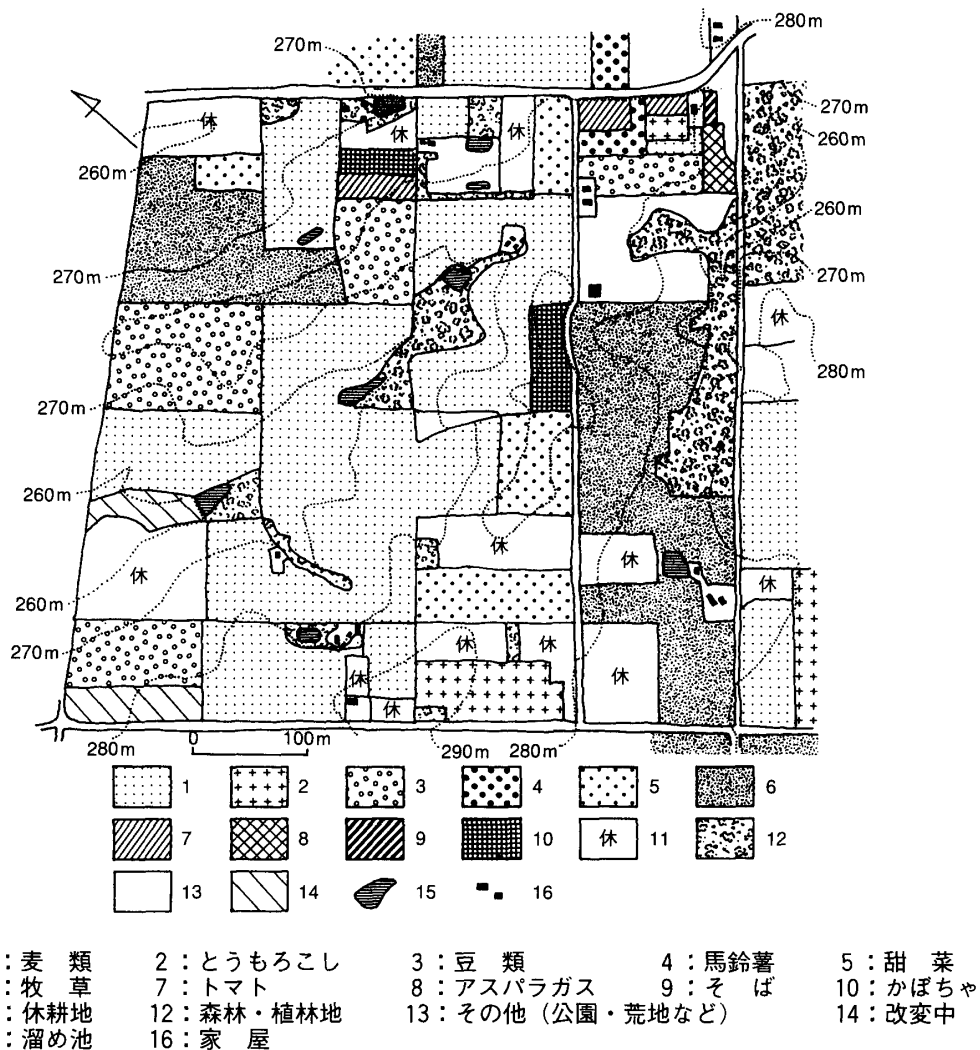


図2 北西の丘の土地利用の一例（2000年8月下旬調査）

られたさまざまな形に変化し、それらが組み合わせられて幾何学的モザイク模様をつくりあげている。またビート、小豆、馬鈴薯、小麦などの作物は輪作されるので、その耕作パターンは毎年変化し、季節によっても作物の種類や生育過程で色調が変化する。また牧草地には円筒形の「牧草ロール」が、また晩夏の豆畑には「ニオ」が並び、丘の風景に変化をつけている。

さらに北海道らしさを演出するのが、ポプラ、カラマツ、ミズナラ、カシワ、そしてシラカバなどの木々である。これらの樹木は60年前頃から植栽されてきたもので、その目的は防風林や耕地や牧場の境界木であったり、牧柵の用材や燃料にもなった。一時期は夕張炭鉱の坑木としての需要もあり、ポプラは製紙用チップとして利用された。これらの木々のなかで生き残ったものが、後に乗用車、たばこ、菓子などのコマーシャルのロケ地に使われ、今では北西の丘の観光スポットとなっている。

波打つ丘陵を区切るパッチワークのような畑地と耕地を縁取る樹木の調和が、日本離れた景色として観光客に人気があり、多くのプロ、アマ写真家の被写体にもなっている。

(2) 「北西の丘」の土地利用の変遷

北西の丘では「ケンとメリーの木」「マイルドセブンの丘」「セブンスターの木」など、テレビコマーシャルやポスターの舞台となったポイントが多くの観光客を集めており、美瑛の丘観光の中心地区のひとつとなっている。

ところで現在の農地景観は、戦後に限っても日本の農政と社会構造の急変、および農業技術の発展にともなう農村と土地利用の変化によって、めまぐるしく変わってきたと推定される。そこで1963年、1972年、1984年、1994年の国土地理院撮影の空中写真の判読を行ない、戦後の土地利用の変遷をたどってみた(図3-a, b, c, d)。

■ 1963年：辺別川と美瑛川沿いの沖積平野は一面の水田となっており、丘陵の縁の急斜面は森林(自然林と人工林)に縁取られていた。丘陵を刻む北瑛川、夕張川、美田川の谷壁斜面にも森林が残され、谷底平野には水田が拓かれて谷津田が続いていた。また丘陵南東端の大村付近では、丘陵面にさえも小規模な水田がみられた。当時の土地利用の割合²⁾は、畑63.5%、水田5.7%、森林21.3%、その他(伐採跡地・荒地など)9.5%である(図4)。水田の割合は1994年までで最も高い。

■ 1972年：1963年当時、美瑛川の沖積平野に広がっていた水田は、美瑛市街地の拡大と生産調整が実施された結果、大幅に減少した。辺別川の沖積平野に一面に広がって

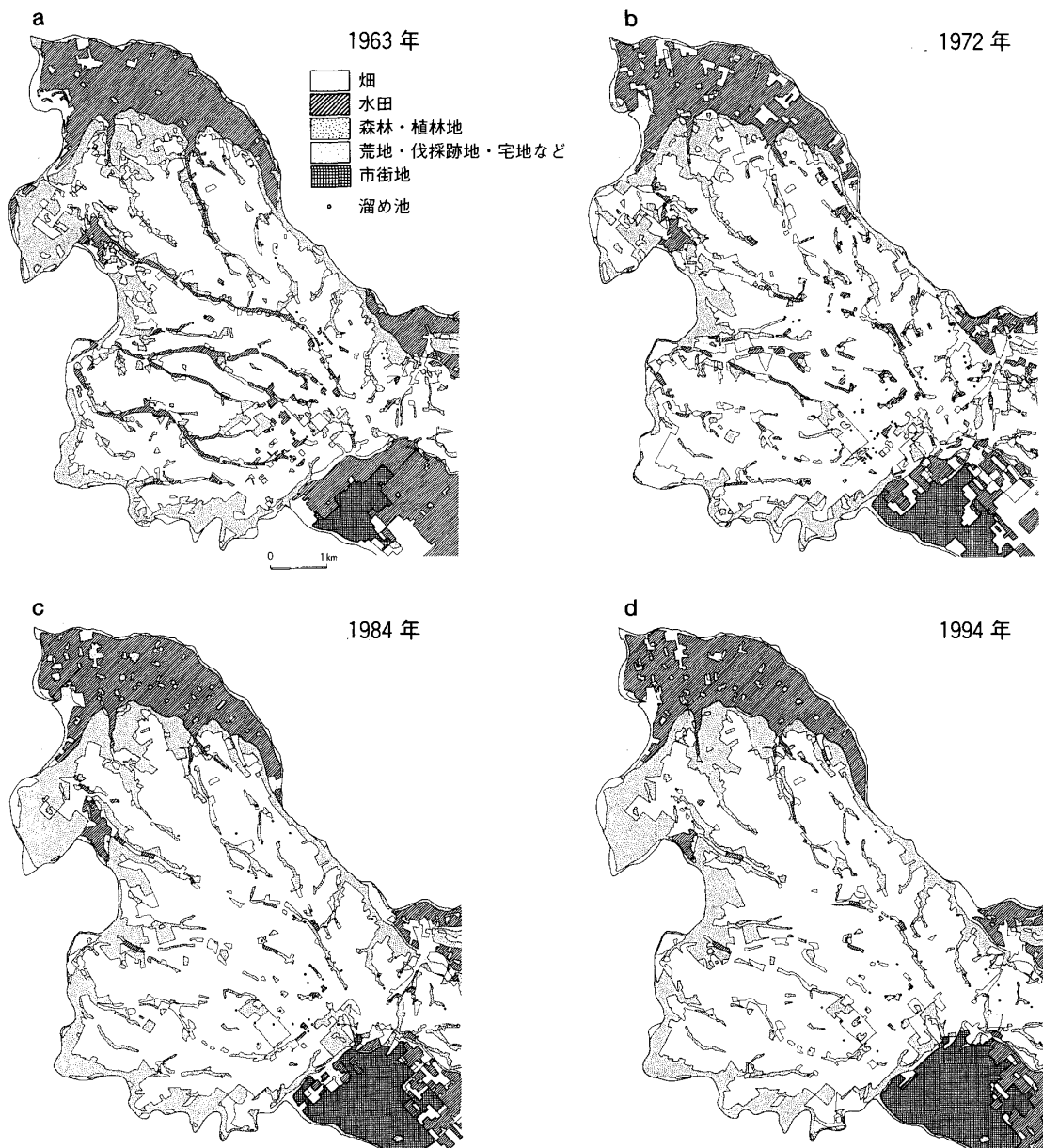


図3 土地利用の経年変化

いた水田の一部も畑地へと転換されている。丘陵面の水田はそれほど減少していないが、谷底平野に連続していた水田は断続的となる。水田面積は1963年の60~70%に、全体に占める水田の割合も5.7%から4.2%に減少する。丘陵の縁の森林の伐採が盛んに行なわれ、その面積も1963年当時の75%ほどに減少する。その分、伐採跡地を含むその他の土地利用部分が広がっており、土地利用の割合は水田4.2%、畑65.1%、森林17.7%、その他13.1%となっている。

■ 1984年：丘陵の縁の伐採地では、植栽木が生長し1963年をこえるレベルにまで森林

面積が回復し、最大となる。逆に水田面積は減少の一途をたどり、谷底平野でもほんの一部だけで作付けされているに過ぎず、1963年当時の半分ほどである。土地利用割合は水田 2.6%、畑 63.5%、森林 24.4%、その他 9.5%となっている。

- 1994年：丘陵内部の水田が数か所に減少し、多くは畑に転換されている。また森林や伐採跡地だった丘陵縁辺部の急斜面に、新たに畑が拓かれたため畑の割合が微増したが、それ以外には1984年から大きな変化はみられない。土地利用の割合は水田 1.6%、畑 66.0%、森林 24.0%、その他 8.1%である。

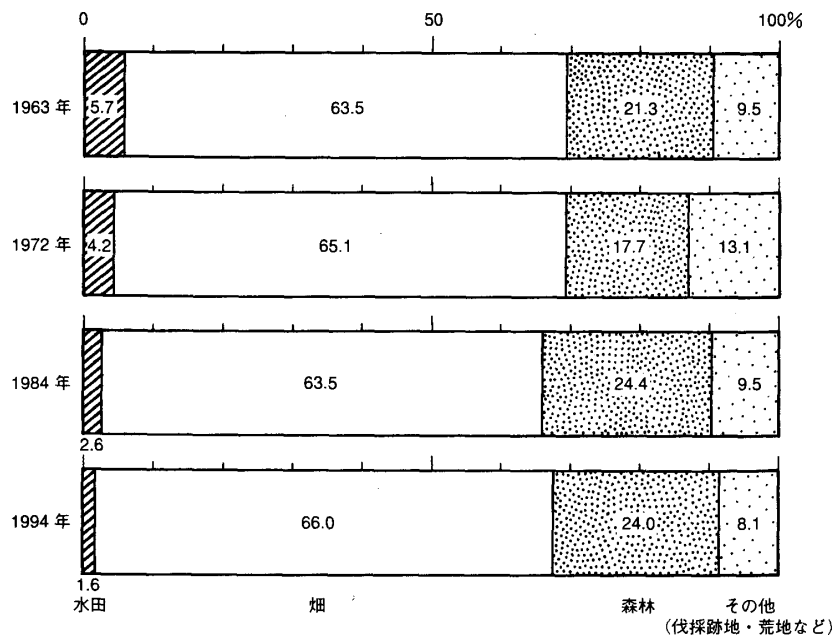


図4 北西の丘の土地利用の割合の変化 (図3-a~dから作成)

規模が小さいため図や数値にはあらわれないが、燃料、堆肥などの供給源や防風林を兼ねていた宅地の周囲にみられた林地(屋敷林)は、住宅の近代化、エネルギー源の変化や化学肥料の普及にともなって必要性が減少し、ここ半世紀あまりの間に急速に消滅していった。この点については、次節でふれる。

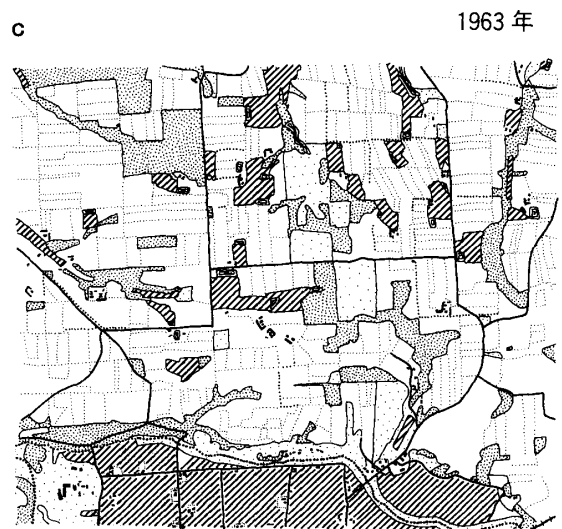
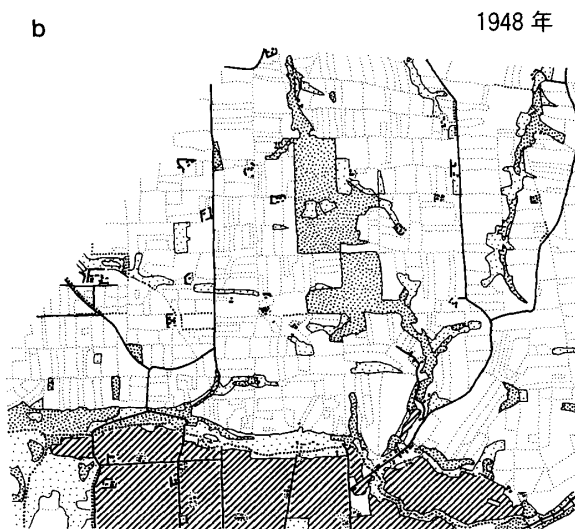
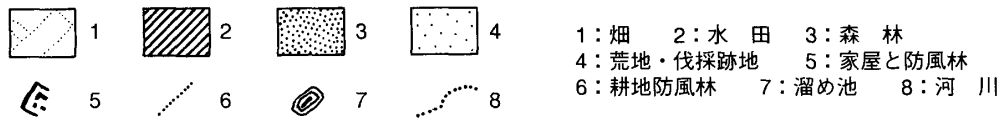
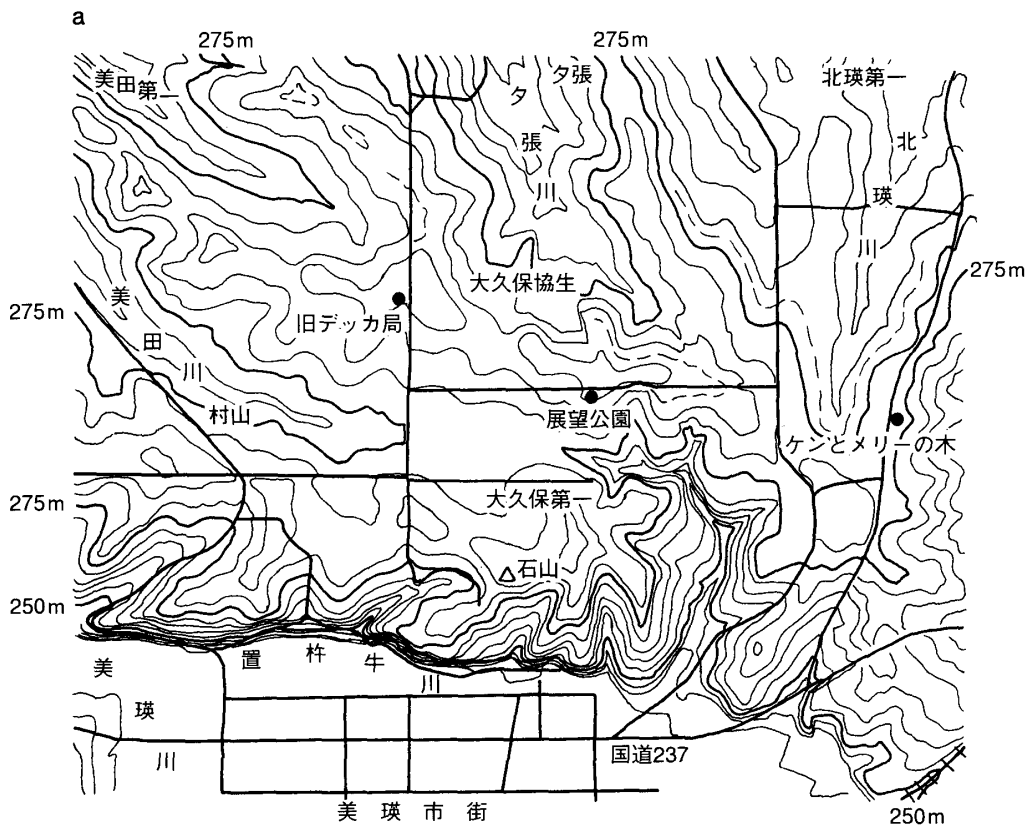
このように北西の丘の土地利用は、小規模ではあるがめまぐるしく変化してきたことが、空中写真の判読によって追跡できる。

(3) 「北西の丘」大村付近の土地利用の変遷

北西の丘の南東部に位置する大村付近は、丘陵の中で最も標高が高く、美瑛市街から大

雪～十勝連峰の展望にすぐれており、展望公園も設置されている(図5-a)。「北西の丘」の核心部ともいえる大村付近において、さらに詳細な空中写真判読³⁾を行なうとともに、『美瑛町土地利用図』(美瑛町, 1980)から1980年の土地利用図を作成し、土地利用および溜め池、宅地防風林、耕地防風林など農村景観の変遷をたどってみた(図5-b, c, d, e, f, g)。

- 1948年：丘陵上に水田はみられず、溜め池もない。耕地の一区画は小さく、畜耕に向けた細長い短冊型のものが多い。ほとんどの農家は、生活用水を確保するため谷底平野か谷頭部に立地しており、それらの大半が家屋のまわりに燃料、堆肥の供給源となる屋敷林ないし宅地防風林をそなえている。それに対し耕地防風林はわずかしみられない。農家の戸数は現在よりやや多かった(図5-b)。
- 1963年：丘陵を開析する谷の谷底や丘陵面に多くの溜め池が築かれ、小規模な水田(棚田)が各所に拓かれていた。水田は丘陵面にもみられるが、多くは谷底部から谷頭部に位置している。図5の5つの年度の中では、1963年が丘陵部における水田面積が最大である。谷沿いに狭長な林が、また丘陵面には方形の樹林(植林地)がみられる。この頃から耕地防風林の列が目立つようになる。大型農業機械が普及しはじめたためか、一部の畑では一区画が大型化してくる(図5-c)。
- 1972年：水田面積は減少し休耕田が目立つようになる。休耕田のそばには溜め池が残っており、その数は5年度のなかで最多となる。耕地の一区画がさらに大型化し、細長い短冊型から長方形～正方形に近い形のものが多くなる。同時に耕地防風林の総延長が最大となる。この時期に「北西の丘」全体でみた場合には森林の割合が最大となっているが、大村地区では伐採地が拡大している。また化学肥料、プロパンの普及で燃料、堆肥を供給してきた屋敷林が減少する。美瑛デッカ局の鉄塔ができ、美瑛駅北側の沖積平野に工場、倉庫、宅地が広がり始める(図5-d)。
- 1980年：水田は1972年に比べると半減し、8か所ほどに減少する。畑地の一区画がさらに広くなり、大型農機の普及が一段と進んだことがわかる。石山付近をはじめとして、伐採跡地の植栽木が生長し森林面積が拡大する。なお基図とした『美瑛町土地利用図』からは宅地防風林の存否が読図できなかった(図5-e)。



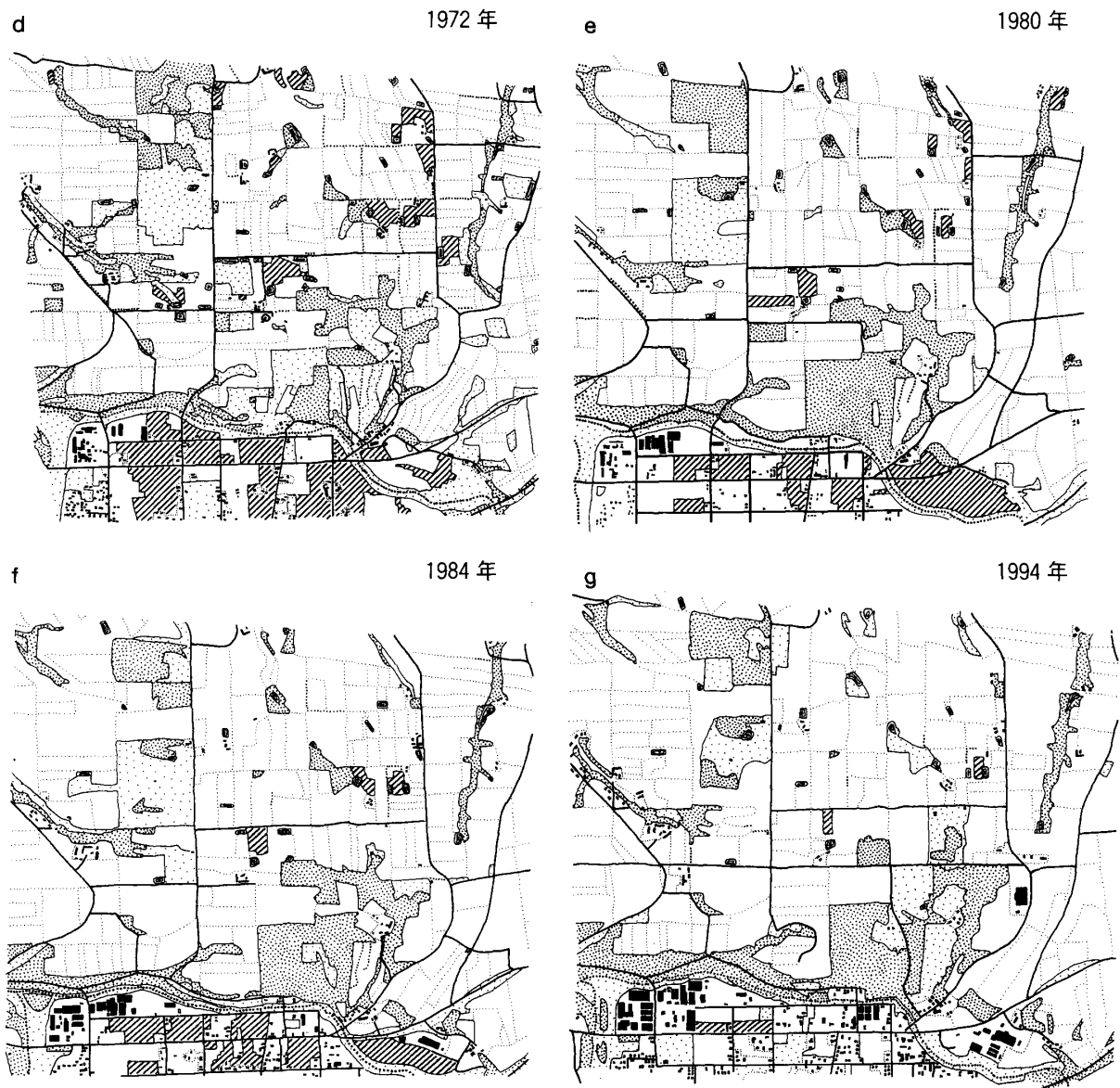


図5 大村付近の土地利用と景観の経年変化

- 1984年：水田がさらに減少し、この地区では3か所だけになった。同時に溜め池の数も急減する。1972年に休耕田となっていた耕地が牧草地や畑地に転換される。また溜め池も埋め立てられて耕地の一部に取り込まれ、痕跡を止めないものが多い。同時に大型農機の妨げになる耕地防風林が急減する。また宅地防風林を備えた農家の割合も、1972年当時にくらべると減少する（図5-f）。
- 1994年：水田は2か所のみとなる。溜め池は水田の消失ほどには減少していない。土地利用の割合は1984年から変化しないが、土地区画が一層広くなる。小区画の耕地は、農家の周囲の自給用農地だけとなる。また耕地防風林のほとんどがなくなる。こ

の時期になると丘陵面に倉庫や非農家の建物が目立ち始める（図5-g）。

2001年現在、この地域に水田は皆無となった。1995年に丘の縁にあった給水塔を覆うように展望台が建設され、その周辺はラベンダーなどが植栽された展望公園が整備されている。また2001年にデッカ局が廃止されたのにもない、鉄塔が撤去されて開放的な景観がよみがえった。しかし近隣にはペンション、レストランや土産物屋などの建物が目立つようになった一方、離農農家の廃屋も見られる。

（4）丘に拓かれた水田の消長

前述のように、1948年の空中写真（米軍撮影）を判読するかぎりでは、辺別川と美瑛川沿いの沖積平野は水田に、丘陵は広く畑地として利用され、丘陵の縁の急斜面は森林として残されている。いわば地形、地質の違いにともなう水文、土壌など地因子の違いにしがって、調和のとれた土地利用景観ができあがっていた。

その後の丘陵における土地利用の変遷のなかで、とくに水田の消長が目立っている。1963年になると、従来は谷底の沖積低地だけに限られていた水田が丘陵面にまで広がってくる。富良野地区における水田面積は、1950年代の食料増産政策によって増加し、1960年代になると戦前の最大規模を回復する（青野・尾留川編、1979）。1963年当時には、丘陵を刻む谷の沖積低地に小規模な谷津田が連続していたほか、丘陵斜面や丘陵面の方々にも小規模な棚田が造成されていた。

丘陵内部では表流水が得にくいいため、水田耕作には溜め池が必要である。美瑛の丘では、雪解け水を確保するために小規模な溜め池が掘られた。丘陵に築かれた数百坪ほどの小さな溜め池は、地元で「タコツボ」と呼ばれている。基盤の火砕流堆積物が熔結している（美瑛熔結凝灰岩）ため不透水層となり、また風化した熔結凝灰岩は粘土化するため透水性が悪く、穴を掘るだけで水を溜めることができたという。タコツボの多くは丘陵を開析する谷の谷頭部分に、一部は丘陵面にも掘られてきた。棚田の最上段がタコツボに当てられていることが多い。

美瑛町では1970年頃に最も水田面積が広がったが、1971年にコメの生産調整が本格化するとともに減少に転じる。水田は畑や牧草地へと転用され、用水池の機能を失ったタコツボも減っていく。一部はその水を農薬散布用や農機の洗浄用として使うために、しばらくの間は残されることもあったが、多くは埋め立てられ消滅していった（図6）。空中写真の判読によれば、丘陵全体で1963年に53、1972年には113で最多、1984年に61、1994年に50か所と変化している。タコツボの数は美瑛町の水田面積の増減に歩調を合わ

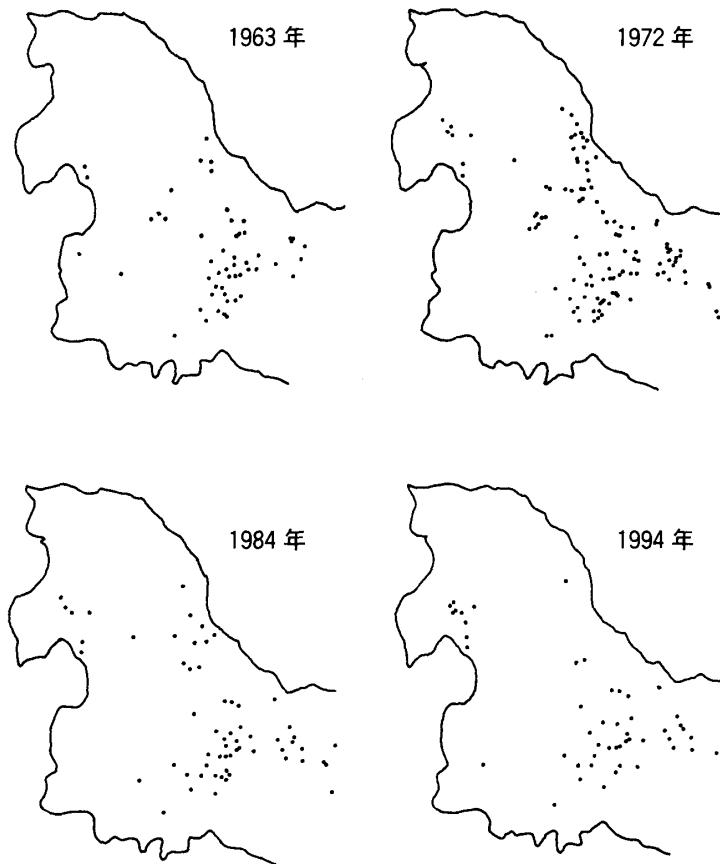


図6 「タコツボ」の消長

せるように推移するが、その減少は水田面積の減少より少し遅れる傾向にある。したがってタコツボの数の消長から推定すると、北西の丘で水田面積が最大となったのは、美瑛町全体で水田面積が最大になる1970年より少し早い1960年代後半と推定される。1963年や1972年当時の丘陵の景観は、波打つ畑地の各所に溜め池をともなった棚田が散在するという、現在とはかなり異なった景観が展開していたことになる。

現在では宅地に近接するタコツボが、庭の一部に取り込まれる形で残されているものの、その多くは用途がないまま放置されている。そのようなタコツボはヤブに囲まれ、観光客の目には触れにくい。視界のおよぶかぎり畑地が広がる現在の景観から、畑の間に散在していた‘内地’的な棚田や谷津田の景観を想像することは難しい。

(5) 畑地景観の変遷

図5からも明らかなように、耕地の単位区画（作付単位）は年を追うごとに広がっているが、平均作付単位の広さは、1948年を1.0とすると1963年は1.6、1972年は2.0、1984年は2.9、1994年は3.1と拡大の一途をたどってきた。これは大型農機の導入と関

係が深く、大型農機による農作業の効率化を進めるため、耕地の一区画を拡大させた結果である。美瑛町の農家のトラクター保有台数は、1965年に62台だったのが1975年には606台、1985年に1547台、1995年には2096台と急増してきた（美瑛町、1998）。北海道らしい大規模作付けによる雄大な農業景観は、機械化農業の普及によって実現したものといえる。

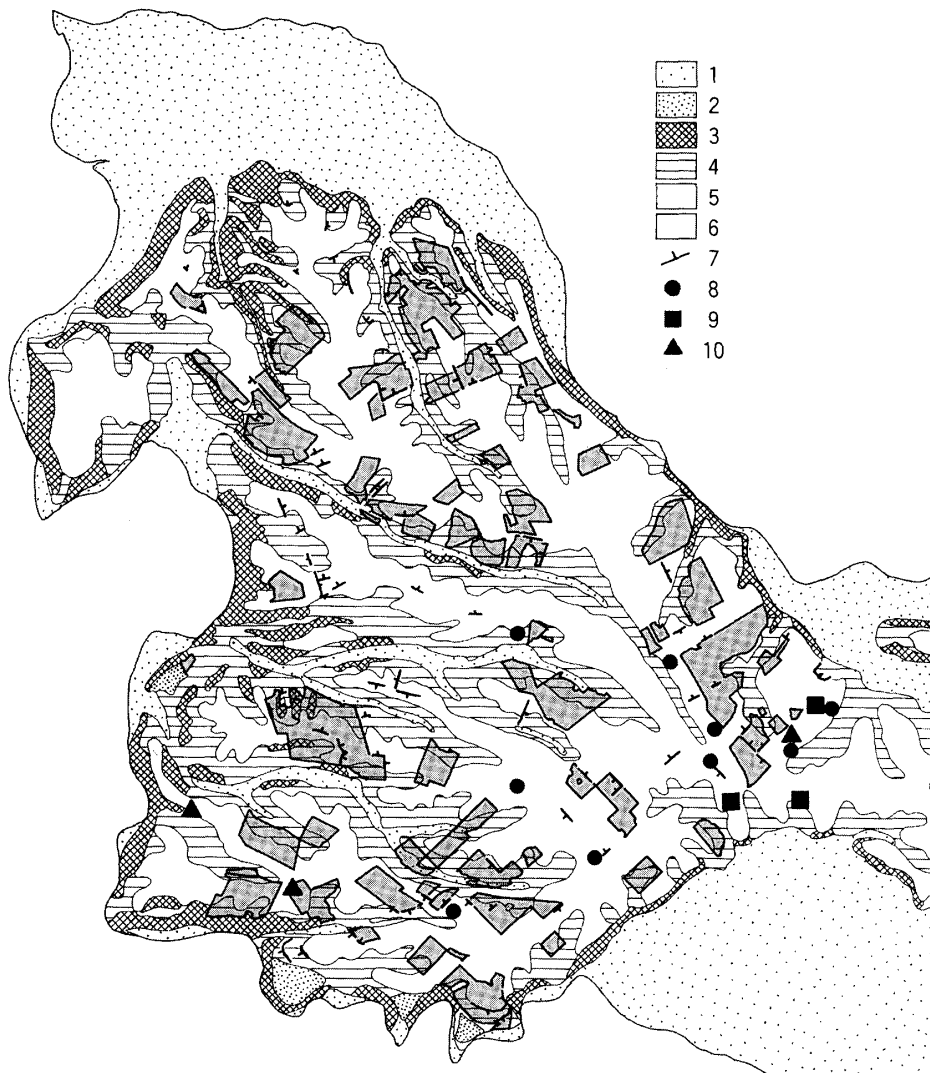
また機械化農業の進展は、大型農機による作業の障害となる耕地防風林の減少をもたらした。美瑛の年平均風速は1.7 m/s（札幌管区气象台、1993）と弱いので、風食防止を目的とした防風林は必ずしも必要なかったようだ。帯状の防風林の多くが取り除かれて視界が開けた一方、部分的にはカラマツの列やポプラやミズナラなどの孤立木が残り、現在の美瑛らしい景観が出現することになった。

（6）地形改変と景観

雄大な農業景観を演出する滑らかな曲線の畑地は、人工的な地形改変によって作り出された景観である。丘陵斜面の各所で角礫層を観察することができることから、波状地形は氷河時代の寒冷気候下における周氷河作用によって、その土台が形成されたものと推定される。周氷河性波状地は、後氷期になると下流側から河食を受けて新しい谷に刻まれたが、河食の及ばなかった谷頭部には皿状の地形が残されている。

開拓期以来、長年耕作されてきた農地は徐々に平坦化されてきたと思われるが、本格的な地形改変は農業の機械化と連動する。1960年代になって機械化農業が導入され、それが普及するにしたがって、大型農機の耕作に適するように積極的に平坦化が進められ、周氷河性波状地に刻まれた後氷期の谷は埋めるように均されてきた。土地改良は現在でも続けられているが、それはかつて緩やかに行なわれてきた小規模な土地改変とは異なり、広い面積を対象として大型土木機械を使って行なわれる公共事業である。たとえば、国や道の事業として昭和56年から平成15年にかけて、畑地帯総合整備事業にともなう層厚事業（均平事業）が実施されているが、美田地区の185 haと北瑛地区の192 haの事業計画のうち、2000年までに80～90%で事業が終了した（図7）。この事業は表土を剥ぎ取った後に傾斜地の凹凸をならし、地下の風化礫や円礫を篩い取った後、表土を埋め戻すもので、機械化耕作を容易にするものである。

ところで層厚事業は地籍の一筆単位で行なわれるので、区画の縁では隣の耕地との間に段差（法面）が生じることになる。耕地間の段差は各所に残されているが、中富良野付近の丘陵にみられるような大規模改変ではないので目立たず、植生が繁茂し特段の違和感はない。このような土地改変も時間の経過によって景観に馴染んでおり、長い振幅の滑らか



- | | | | |
|------------------------------|---------------------------|---|------------|
| 1 : 沖積平野 | —おもに水田 | } | 河成堆積物 |
| 2 : 河岸段丘 | —おもに畑 | | |
| 3 : 美瑛火砕流堆積物のつくる 20 度以上の急斜面 | —おもに森林・植林地、一部畑地化 | } | 火砕流堆積物 |
| 4 : 美瑛火砕流堆積物のつくる 20 度以下の緩傾斜面 | —おもに畑・牧草地に利用 | | |
| 5 : 美瑛火砕流台地面と斜面上部の凸型斜面 | —ほとんどが畑・牧草地に利用、一部は水田 | | |
| 6 : おもに 4, 5 における均平化事業施工地 | —ほとんどが畑・牧草地に利用 | } | 新しく創出された景観 |
| 7 : 耕地間の段差 | —6 によって生じた法面で、6 の外縁部に位置する | | |
| 8 : ペンション・民宿 | —すべてが 5 に位置する | | |
| 9 : 一般住宅 | | | |
| 10 : 赤麦作付地 | | | |

図 7 北西の丘の景観単位（エコトープ）区分と人工景観

な波状地形をいっそう際立たせる役割を演じている。

以上のように美瑛の雄大な耕地景観は、機械化農業の進展にともなって進行した耕地の大型化、防風林の減少、地形の均平化という人為的関与によって作り出されたものである。人工的地形改変によって造り出された景観とはいえ、見る者に一種の安心感を与える優しさをもっているのは、自然景観の改変が小規模かつ長年にわたってゆるやかに行なわれ、時間の経過によって景観に馴染んできたからに他ならない。

3 観光と諸問題

(1) 観光業の発展

富良野盆地観光の中心である富良野市への観光客入り込み数は、全国的な観光ブームとなった昭和50年代から急増してきた。昭和50年に旧国鉄のポスターで中富良野のラベンダー畑⁴⁾が紹介され、さらに昭和56年に倉本聰のシナリオ『北の国から』がテレビ放映されたことがブームに火をつけた。平成になると隣接する美瑛町へも足を伸ばす観光客が増加しはじめるが、そのきっかけとなったのは写真家前田真三のフォトギャラリー「拓真館」の開館（昭和62年）であった。四季折々の風景写真がポスターなどを通して世に紹介されると、日本離れした美瑛の景観が注目を集め、次々にTVコマーシャルのロケ地に使われた。そこに登場した木々は「・・・の木」などと呼ばれ、それらを訪ねるのが一般的観光コースとなっている。

その頃から美瑛町は「丘のまち美瑛」を前面に出しPRを始めるが、日頃から見慣れている丘の景色、言ってみれば単なる畑が観光資源になるとは予想だにできなかった、と地元の人はいう。今では観光客の入り込み数は140万人をこえており、海外から訪れる観光客も多い⁵⁾。

(2) 観光公害と景観破壊

① 移住者の増加と景観破壊

北西の丘では開拓時代以来、農家は水を得やすい谷沿いに立地してきたが、近年では美瑛の景観に憧れて移り住む人びとが増え、丘の上にも建物が目立つようになってきた⁶⁾。移住者の多くはペンションを経営するケースが多い。当然のことながら、それらは眺望のいい丘の上に建てられることになる。とくに北西の丘では、新しい建物のすべてが丘陵上にあるため（図7）、旧来ののどかな農村景観が失われてきた。鮮やかな色彩の新しい建物は、素朴な景観のなかに溶け込むことがなく、調和を保ってきた景観が破綻をきたして

いる。

現在でも役場には移住希望者からの問い合わせが後を絶たないという。町としては過疎化に少しでも歯止めがかかるのは有り難いのであるが、最大の観光資源である農業景観の保持との板挟みで頭を痛めている。何らかの規制策が早急に求められよう。

②観光公害

ペンション、レストラン、土産物屋、観光農園などの副業でも始めないかぎり、畑という生産の場を見るだけの観光は、農家にメリットはない。むしろ日常生活、労働の間近かに、見ず知らずの人が一方的に入り込んでくる精神的圧迫感、農作物の踏み付け、農道における車のスタックなど、有形無形の観光公害が農家に一方的に押しつけられる結果となっている。また入り込み数が最大となる7月は小麦の収穫期にあたるため、交通渋滞や路肩駐車が農作業の妨げとなっており、農家と観光客の摩擦を生んでいる。

③土壌侵食

農業が基幹産業であり、かつ調和のとれた農村景観が観光の核になっている美瑛において、健全な農業の維持が重要であることは論を待たない。しかし畑地の保全で危惧されるのが土壌侵食の問題である。驟雨の際には農道に茶色の泥水が流れ出し、畑の各所に雨裂侵食 (rill erosion) の跡をみることもめずらしくない。ある野外実験によれば23～25度の傾斜の耕地では、8～9度の傾斜の耕地の2倍近い土壌流亡量が計測されている (横田, 1976)。丘陵を開析する谷の谷壁斜面下部など、以前は樹木におおわれていた20度をこえる急斜面が1994年には部分的に耕地化されており、畑地の造成によって土壌侵食の危険地域が新たに作り出されていることがわかる。

急傾斜面の耕起作業では、大型農機が等高線方向に走りにくいいため、最大傾斜方向に往復する上下耕が行なわれる。上下耕を行なう耕地では、表流水が生じた場合に最大傾斜方向に走る畝 (上下畦) にそって土壌が流出しやすい (横田, 1976)。土壌の流亡を助長しているのが化学肥料の使用による土壌の保水性の低下である。ある農家によれば、強めの驟雨でha当たりトン単位で土壌が流失することがあるという。急傾斜地の耕地化と機械化が、長年にわたって築かれてきた調和のとれた土地利用に破綻をきたしている。

4 農村景観と観光の将来

美瑛への観光客入り込み数は、年間の80.0%が上半期 (4～9月) に集中しており、ピークになる7月の混雑は相当なものである。道内のリピーターはこの時期を避ける傾向にあり、すでにマス・ツーリズムの限界に達しているといえる。農家への影響などを考え

れば、夏季におけるこれ以上の入り込み数の増加は、マイナスの結果を生むだけであろう。

北海道は四季折々の景観の変化が際立っており、四季を通じて人をひき付ける潜在的魅力を備えている。美瑛町には、「四季」と銘打った公的施設が4か所（四季の情報館、四季の塔、四季の交流館、四季の橋）あり、町も通年型観光を意識した広報を展開していることがうかがえる。農地景観が観光資源となっている以上、今後は農家、町、観光客の相互理解のうえに立った観光、つまり地元の生活、文化を損なうことのない観光の在り方が求められる。具体的には短期間に集中する観光客を分散させる取り組み、つまり通年型の観光への転換と、自然と地元への負荷を最大限に抑えたソフト・ツーリズム（横山、1999）やエコ・ツーリズム（日本自然保護協会、1992）への取り組みが期待される。

また美瑛町観光の将来は、観光の対象となっている農地・農村景観の維持が前提である。健全な農業の展開は、町の基幹産業の発展というだけでなく、観光収入の面からも重要であるといえる。しかし北西の丘の景観は、高度経済成長にともなう社会構造の変化や農業政策の転換、土地改良事業や機械化農業の進展、住宅の近代化、エネルギー転換などによって、戦後の半世紀あまりの間にめまぐるしい変容をとげてきたが、その変化が雄大な農業景観を創出する方向に働いてきたことは、むしろ好都合であった。しかし周知のとおり農産物の内外価格差、後継者問題など多くの課題をかかえる日本の農業は、ウルグアイラウンドの合意を経て、ますます危機的状況におかれることになった。自然景観は人為的働きかけがないかぎり、その変化速度がきわめて遅いのと対照的に、人文景観は当事者が望むと望まないにかかわらず、外的要因によって容易に変貌をとげる脆弱な景観である。現在の美瑛の丘の調和のとれた健全な田園風景を維持していくには、観光との調和を視野に入れた農業の振興が課題である。

注

- 1) 美瑛火砕流堆積物の熔結部分で、美瑛軟石ともいう。黄色～桃色味を帯びた美しい凝灰岩で、倉庫、蔵などの石材に使用されてきた。
- 2) 丘陵内における水田面積の消長を知るために、現在でも一面の水田が広がる辺別川と美瑛川の沖積平野は除外して算出した。
- 3) 前記の国土地理院撮影の空中写真に加え、1948年の米軍撮影の判読も行なったが、この空中写真には、判読地域の西側の一部が撮影されていない。またこの判読では休耕田（登記上の用途は耕地）は荒地とし、水田には入れていない。空中写真を直接トレースして図化したため、写真の歪みは修正していない。

- 4) 中富良野では戦後になると多くの農家がラベンダーを栽培し、香油を生産していた。その後、採算が取れずたれた時期もあるが、現在ではポプリや香油は香水、石鹸などに加工され土産物として人気がある。今やラベンダーは富良野の代名詞である。
- 5) 富良野・美瑛地区の6市町村(美瑛町・上富良野町・中富良野町・富良野市・南富良野町・占冠村)に宿泊した外国人観光客の延べ人数は、1998年に8327人・日だったのが、1999年には13943人・日に急増している。とくに台湾の北海道ブームを受け、その宿泊者数は10897人・日で全体の78.2%で、2位の韓国823人・日(5.9%)を大きく上回っている(富良野美瑛広域観光推進協議会・富良野美瑛広域観光協会連絡会議, 1999など)。
- 6) 美瑛町内に最近建てられたペンションは50軒、一般住宅は28軒を数える。

参考文献

- 池田保夫・向山栄(1983)北海道、富良野一旭川地域の火砕流堆積物の層序と対比。地質学雑誌, 89, 163-172。
- 国土地理院(1990)『火山土地条件図 十勝岳』。
- 青野壽郎・尾留川編(1979)『日本地誌第2巻 北海道』二宮書店, 623頁。
- 横田廉一(1976)『北海道の気候と農業気象災害』文永堂, 216頁。
- 札幌管区気象台編(1993)『北海道のアメダス統計I』日本気象協会北海道本部, 417頁。
- 日本自然保護協会編(1992)『第1回 PRO NATURA エコ・ツアー ヨーロッパアルプス 自然保護研修 現地視察報告』171頁。
- 美瑛町(1998)『びえいの農業』44頁。
- 美瑛町(1980)『美瑛町土地利用図 1万分の1』8葉。
- 富良野美瑛広域観光推進協議会・富良野美瑛広域観光協会連絡会議(1999)富良野・美瑛広域観光入込数, 1999年度。
- 横山秀司(1999)オーストリアのティロール州におけるソフト・ツーリズムと Ruhegebiet (静かな保養地域)。九州産業大学商経論叢, 40-3, 153-183。

謝 辞

本調査を行なうにあたり、地図や統計資料等の提供をいただいた美瑛町の企画課、農林課、ご多忙にもかかわらず貴重なお話をお聞かせいただいた美瑛町の各農家の方々には、心からお礼申し上げます。現地調査では、札幌大学文化学部比較文化学科平成12年度卒業(第1期生)の吉光杏菜、下田裕子、同日本語・日本文化学科の松岡喜富実の諸氏にご協力いただいた。あわせて謝意を表する次第である。